

ンを演奏する人たちでございます。

なぜかという、それだけ幅広く弾ける楽器だということなんですね。魅力があるという反面、いろんなことができるので、ちょっと

大変。審査をする方は大変だと思います。そういうことを含めたうえでの成績発表になりました。

(山岡秀明／一般上級の部審査委員長)

☆全体講評(篠田元一特別審査員)

皆さん、今日は朝から夜まで長い時間1日本当にお疲れ様でした。僕もこんな長い審査をやるのはめったにないんですけど、皆さん音楽が好きで楽器が好きだっていうのが非常に伝わるので、その疲れもさほどではなかったというのが正直な感想です。

僕は普段ピアノとかシンセサイザーとかやっているわけです。同じ鍵盤楽器でアコーディオンをそういう視点で見ていると、ピアノという楽器はポンと弾いたら音は減衰しちゃいます。もっと伸びてくれて言っても減衰しちゃうわけですね。それに対してアコーディオンというのは、要は蛇腹を動かしている間は音が伸びている、しかも、伸びている音に有機的にこう、ダイナミクスを付けられるというメリットがあると思うんですよね。で、身体を使ってダイナミクスを付けるというのはアコーディオンで見えても醍醐味じゃないかなと思います。

要するに身体を使ってダイナミクスをコントロールできる。それをもろに直接表現できる。そういった意味で言うと、もっともっと蛇腹を動かすしぐさなんかを、僕なんかから見るとちょっと専門でないのでの的外れなことを言ったら大変申し訳ないんですけど、もうちょっと何かあってもよかったんじゃないかなと思います。

そういうアコーディオンの部分を僕たちはどうしてもシンセサイザーに頼るわけですね。

シンセサイザーっていうのはどんなに細かく操作しても、127段階でしか音量も音色も変わらないんですね。それに対して蛇腹を動かすっていうことは空気を通る音が伝わってくる。もっともっと伝播させられるんじゃないかなと思いました。

それとですね、これは直接演奏の内容とは関係ないことかもしれませんが、いくらコンテストと言っても、ここで演奏する以上パフォーマンスってある、非常にポーカフェイスで難しい演奏をするわけですよ。やっぱり、顔で鳴らす音ってあると思うんですよね。

ギターをやっていて例えばチョウキングするとき、イーっと(苦虫を噛み潰したような)顔をしますよね。トランペットで高い音を出すときウツと(ほっぺたを膨らませて)した顔をしますよね。やっぱりそういった顔で鳴らす音っていうのがあると思うんですけど、皆さんいろんな変化を意外とポーカフェイスで弾いてしまっている。(笑)表情ですね。

同じ演奏していてもやっぱり輝きが違って来るんじゃないかと。別に鏡を見て練習しろっていうことじゃないんですけど、顔が意外と大事なんじゃないかなと、コンテストと言ってもイベントが絡んでいるわけですよ。これ、是非この辺も次回から意識して頂けるといいのではないかなと思います。

(篠田元一／特別審査員)

☆各部門の審査委員長よりまとめを、続いて各審査員が分担して講評を述べました（敬称略）



青山 義久



木下 尊規



山岡 秀明



篠田元一（特別審査員）



松永 勇次

《分担した中で指摘されたアドバイスの中から幾つか紹介すると》

左足でリズムをとるとペローに影響しちゃうので、体の芯でリズムをとる練習を。
（初心者部A）

楽器を抱えるとき、真っすぐなのが一番いいわけではないので、自分が一番弾きやすい持ち方にも気をつけるといい。
（初心者部A）

モーツァルトの場合、スタッカートが王様と言われるくらいいろんなスタッカートがあるので、いろいろ試して音の違いを感じてみて下さい。
（初心者部A）

途中、トリオに入ってテンポを変えるとき、譜面に記号がついているから変える弾き方だと、あれ、ここは弾きづらいのかなって感じられちゃうので、やっぱり、自分はこういうテンポに持って行きたいんだという気持ちを出すといい。
（初心者部A）

右手のメロディーを伸ばしているとき、左手ベースの刻みの影響をできるだけ少なくする練習を。蛇腹はつながっているのも物理的に0にするのは非常に難しいと思いますが少なくすることでさらによくなると思います。（初心者部A）

「初心者部B」というのは鍵盤の経験がある方なのですが、蛇腹の経験は少ないというグループですね。ですけど、みなさんととても自然なペローイングですごくいいと思いました。

初心者としては十分ですけど、これから曲をどう膨らませていくか。曲ってというのはなんとなく広がっていったり、テーマがあったり、また、そのテーマを受け取ったり、そういう構成があるわけです。そういう構成を読み取ることでもっと印象的な演奏になると思います。

（初心者部B）

ピアノの経験がある方は、どちらかというと右も左も指に力が入っている方が多いように思います。ピアノからアコーディオンに替わるとき、構造が違う点を理解するといい。アコーディオンの場合、右手の肩から指先までできるだけ力を抜くように。それと同時にペロー運動を忘れずに同時進行できれば、バランスの取れた奏者になります。（初心者部B）

例えば、60歳過ぎると指が動かなくなるとか、覚えが悪くなるとかいろんなことがあります。そうすると音符に対する向かい方も変わってくるのか、少し間違っても、楽しければいいやみたいになっちゃうところがあるんじゃないかと思います。でも、やっぱり少しでも正確に弾くというのは長生きの秘訣でもあるわけですから、そういうところもあいまいにしないで取り組んで欲しいと思います。(シニアの部)

※時間が押してしまい、個々の演奏者への講評が途中までしかできなかったことについて大変申し訳なく思います。紙面を借りてお詫びいたします。

*****《ゲスト演奏曲目》*****

オラン（平賀康子：アコーディオン弾き語り）＆江森 孝之（ギター）

1. たったひとつの月＋フランベモンタルバネーズ…(オリジナル曲)
2. まんげきょう＋アイリッシュ民謡…(オリジナル曲)
3. 誰も知らない気持ちの眠る場所…(オリジナル曲)
4. 野に咲く花…(オリジナル曲)



5. オーシャンゼリゼ
(会場も一緒に歌う)
6. ジャンゴのミュゼット
7. ボンボヤージュ…オリジナル曲
(行ってらっしゃいの意)
8. 風に歌ってどこまでも
(オリジナル曲)

*****《打ち上げ交流会に出られた方の感想など（抜粋）》*****

※審査員及びゲスト以外の方はイニシャルで表記させて頂きました。

今日は台風ということで、審査員をお願いしていた西尾先生が来られなかったのが、本人は今回が最後だと言っていたので僕は非常に残念です。これからも何らかの関係でやっていきたいと思っています。私たち関東講師懇談会もそろそろ世代交代かなと言いながら時間が経っていますけど、来年あたりはそれを真剣にやらなければ いけな

いと思っています。今日は檜山先生も審査に参加して下さったし、いろいろな新しい若い力を関東の講師にしていきたいなと、そういうことを実現したいと思っています。シニアも同様に育てていきたい。

最後に、12月にJAAの国際コンクールがあります。今日出場された皆さん、ぜひ来てほしいなと思います。(松永 勇次／審査員)

第1回目から一緒に作ってきて、今回もたくさん若い人が出場して素晴らしい会

でした。松永先生が西尾先生の話を読まれたが、どういう形で引き継ぐかっていうこと